

## 「地域」について考えてみた

| 相澤 明憲 Akinori Aizawa

医療や福祉の分野で「地域」という言葉が常に使われる。地域包括、地域医療、地域支援等々。もう40年ほど前に、精神科病院と地域のかかわりをテーマにしたシンポジウムのようなものに出席した。シンポジスト同士の話がどうにもかみ合わないと感じたのだが、それはあるシンポジストの話す「地域」は患者をとりまく家族や隣人を意味しており、他方では「地域」が病院の存在する場所やその住民のことを意味しているという具合に、「地域」という言葉がさしているものが違っているからだった。「地域」という言葉は、誰でもわかっているようだが実際には意味が曖昧なところがあり、話す人が適当に意味をもたせているようである。

行政が熱心に取り組んでいる「地域医療構想」というものがあるが、一番議論されているのはその行政区分内の病院の統廃合の話であるから、この場合の「地域」には当然病院が含まれている。一方、精神科医療の大きな流れとされる「病院から地域へ」という言い方の場合の「地域」には病院は含まれていないようである。

障害のある人を「地域で支える」という言い方がよくなされる。このときの「地域」というのは単なる場所を言っているのではなく、具体的に生活の手助けをする人や仕組みを含んでいるようである。公設民営の社会生活適応施設としてこの場合に精神科病院は「地域」のなかに入るのかどうか。

著者が住む熊本県で、「あかねの里」という自立訓練事業所が運営されている。この施設は、1981（昭和56）年に県内すべての民間精神科病院が出資しあって土地を購入し、そこに県が施設を建設したものである。そして公設民営の社会生活適応施設として熊本県精神科病院協会に運営が委託された。その後さまざまな紆余曲折があり、現在は完全民営化され、協会（現在の名称は熊本県精神科協会）

が運営している。開設当時、そのような施設は精神障害者の長期収容施設にはかならないとして、あちこちから批判する声があったと聞いている。しかし40数年の間に約1,900名の人がこの施設を利用し、そのうち約1,100名が何らかの形で社会復帰を果たしている。まだ障害福祉サービスなどない頃である。施設スタッフは、入所者の外勤先を開拓するため企業回りをしていた。福祉系の学校で学んだ人たちはさぞ面食らったに違いない。しかしそのような目の前にある課題を一つひとつ解決していく活動が入所者の社会復帰につながった。

開設当初の批判は、そのような施設は「地域」とは言えないというものだったのだが、年月を経てみればその批判は的外れだったと言ってよいと思う。そもそもどこまでが地域でどこまでがそうではないという問題の立て方がおかしかったと言えよう。

「地域で支える」あるいは「地域共生」などの言葉は意味ありげで立派であるが、精神障害をもつ人それぞれに症状や障害のありようが違っており、その人を取り巻く人間関係も違い、また行政の支援や医療機関の状況も千差万別なのであるから、現実に障害者一人ひとりを支えようとするときには、その事例一つひとつに応じた個別的で具体的な対処が必要である。

ある精神科教室の教授は、入院患者を受け持った新人研修医に対してただ一言「患者の身の立つようにしてあげなさい」とだけ助言されたという。著者はその話を新米時代に聞いて、今も大切に記憶している。地域包括ケアや地域共生社会云々の大きな話も重要だが、「地域」というものを抽象的にとらえているだけでは、目の前にいる人を「身の立つようにする」ことはできない。それぞれの足元の課題の一つひとつに目を向けるということを忘れてはならないであろう。